



Title	第3章 フィンランドにおける言語の楽の現状と課題
Author(s)	野崎, 剛毅
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 34, 39-62
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61377
Type	departmental bulletin paper
File Information	300_ch3.pdf



第3章 フィンランドにおける言語の巢の現状と課題

野崎 剛毅

札幌国際大学短期大学部准教授

はじめに

現在、世界には6,000～7,000種類の言語があり、そのうちの半数は話者6,000人以下であると言われている。また、全体の90～95%の言語は、「子供がすでに母語として習得しなくなっている『絶滅寸前の（moribund）言語』」か、「まだ習得はつづいているが、このままでは21世紀末までに同じグループに入る可能性がある『消滅の危機に瀕した（endangered）言語』」であるという（宮岡 2007：27）。言語はそれぞれの民族特有の文化や思想の根源である以上、少数言語の保護は、マイノリティの権利を守る意味でも喫緊の課題となっている。

そのようななか、消滅に瀕した言語の保護と復興について注目されているのが“Language Nest”（言語の巢）である。言語の巢とは、言語的マイノリティの就学前児童を対象として母語の習得を目指す取り組みである。保育所等においてマジョリティの言語を一切使わず、母語だけで生活のすべてを行う。家庭や社会ではマジョリティの言語が使用されるため、言語の巢に通う子どもたちは、小学校入学段階までにマジョリティの言語と母語の2つの言語を使えるようになるという。

本章では、フィンランドの言語の巢で行った調査をもとに、言語の巢スタッフや保護者の意識からその可能性と課題を明らかにすることを目的とする。

第1節では、ニュージーランドで誕生した言語の巢がフィンランドでどのように受け入れられていったのかを、先行研究やフィンランド調査での聞き取りなどからまとめる。第2節では、保育者調査から、言語の巢での保育の実態を明らかにする。第3節では、保護者調査をもとに、言語の巢の課題を明らかにしていく。

第1節 言語の巢の概要

第1項 言語の巢の誕生と展開

初めての言語の巢は、1973年にサモアとクック諸島の女性たちがニュージーランドで始めたAoga Amataであるとされている（Chambers 2015：27）。しかし、実際に言語の巢が世界中に広まっていくきっかけとなったのは、ニュージーランドのウェリントンに作られたTe Kohanga Reo（テ・コハンガ・レオ、マオリ語で「言語の巢」）であろう。ニュージーランドの先住民族であるマオリの人々により、マオリ語の保護やマオリとしてのアイデンティティ確立を目的として1982年に作られたテ・コハンガ・レオは、翌年には80ヶ所、翌々年には250ヶ所、3年後には400ヶ所と飛躍的に拡大していった（松川 1986：67；Chambers 2015：29）。2004年には545のテ・コハンガ・レオで10,000人の子どもたちが保育を受けており、4,000人のスタッフと2,000人のボランティアが運営に携わっている（Pasanen 2010：96）。

ニュージーランドで注目された言語の巢は、すぐに世界中の先住民族へと広がっていった。最初

のテ・コハンガ・レオができた1982年には、ハワイにも言語の巣が作られている。80年代前半にはカナダへ言語の巣は展開し、その後アメリカやアイルランド、ウェールズ、スコットランドへと広まっていった。

北欧やコラ半島の先住民族であるサーミのなかで、最初に言語の巣に注目したのは、ノルウェーのルレ・サーミであった。1989年、テュスフィヨールに最初の言語の巣が作られている。

だが、サーミによる言語の巣でとくに著名なのは、フィンランドのイナリ・サーミとスコルト・サーミによるものだろう。フィンランドにおける最初の言語の巣は、1993年、スコルト・サーミによってセヴェッティヤルヴィに作られた。しかし、国際先住民年とのかかわりで作られた最初の言語の巣は、予算の目処がたたなかったこともあり、半年で閉鎖されることとなった。セヴェッティヤルヴィでは1997年に言語の巣が再開されたものの、2001年には再び閉鎖、2010年に改めて開設され、これが現在まで運営されている。スコルト・サーミの言語の巣はセヴェッティヤルヴィのほか、2008年にはイヴァロにも作られている。

一方、イナリ・サーミによる言語の巣は、1997年にイナリに作られた。その時から言語の巣に勤めている現在の園長によると、この時期のイナリ・サーミ語は「絶滅状態」にあり、イナリ・サーミの子どもは「数人」レベルにまで減っていたという。そのような状況のなか、イナリ・サーミ語協会が中心となり、フィンランド文化基金の補助を受けて言語の巣が設立された。初年度には18人の申し込みがあり、3歳から6歳までの子ども8人を2人の保育者で預かりスタート、2002年に園舎を移転した際に、0歳から受け入れるようになった。

その後、2010年にイナリとイヴァロにイナリ・サーミの言語の巣が作られるなど徐々に拡大を続け、2015年8月の調査時点ではイナリ・サーミ語の言語の巣がイナリ2ヶ所、イヴァロ1ヶ所の計3ヶ所、スコルト・サーミ語の言語の巣がイヴァロとセヴェッティヤルヴィに1ヶ所ずつの計2ヶ所、北サーミ語の言語の巣がウツヨキとカリガスニエミ、ブオツォ、オウル、ヘルシンキに各1ヶ所ずつで計5ヶ所となっている（図3-1）。また、ロヴァニエミにも北サーミ語の言語の巣を作る計画が進行しているという。

可を出す。同時に、サーミ議会に言語の巣創設の申請をすると、補助金をだすかどうかの検討がなされる。「言語の巣」の定義については、「これといったものは確立していない」（イナリ言語の巣園長）といわれるように、実際にフィンランドの保育制度的に位置づいたものではない。事実上、サーミ議会からの補助金が出ていたことが「言語の巣」の定義となっている。なお、サーミ議会からの補助金は単年度ごとであり、毎年申請しなければならず、いつ打ち切られるかわからないという不安定さを各言語の巣はかかえている。

サーミ議会からの補助金が決まると、補助金が議会から自治体経由で言語の巣へと払われることになる。多くの言語の巣では運営主体が自治体となるため、保育者は自治体から給与を受ける公務員となる。各自治体には保育サービスを整備する義務があるため、言語の巣を認可してサーミ議会から補助金を受けることができれば、その分保育にかかる予算を減らすことができる。そこで、サーミ語を守るために言語の巣を拡大したいサーミ議会との間に、いわば利害の一致が生まれている。

イナリの2園とイヴァロの1園はイナリ・サーミ語協会が直接運営しているため、給与もイナリ・サーミ語協会が出している。イナリ・サーミ語協会は、自治体が乗り出す以前から言語の巣を運営していたため、自治体がイナリ・サーミ語協会へと補助金を出す、担当者の言葉を借りれば、「自治体がイナリ・サーミ語協会からサービスを買う」形で運営がなされている。そのため、イナリ・サーミ語協会が運営する言語の巣では、自治体から指図を受けることなく、自分たちの考えでやり方が決められるという。また、ヘルシンキの言語の巣は、自治体ではなく都市サーミ協会が直接運営している。独自に様々な補助金への申請を行っているため、自治体やサーミ議会以外からも多くの補助金を受けている。

かつて、言語の巣の保育料は無料であった（水本 2004:115）。しかし、現在は保育料をとっている。保育料は日本と同様に保護者の収入に応じて決まる。ヘルシンキの言語の巣では独自に保育料の徴収をしているが、市の保育園と同水準になるよう、1ヶ月に150ユーロほどとなっている。

入園に際しては、サーミであるかどうかはとくに問われないという。サーミ語を学びたいと考える気持ちを重視する。そのため、サーミでない人が入園を希望しても、空きがあれば受け入れるし、後にサーミの入園希望者がきたからといって退園してもらおうということもないという。実際、1997年にイナリの言語の巣ができた際、最初に入園した8人のうち、イナリ・サーミは1家族しかおらず、残りはフィンランド人であった（Pasanen 2010:99）。あくまでも第1の目的はサーミ語話者を増やすことにあるため、「両親がイナリ・サーミの子どもだけに限定してしまうと、それ以上イナリ・サーミは増えなくなってしまう」（イナリ言語の巣園長）からである。ただし、ヘルシンキの言語の巣は、イナリなどとは違う独自の基準を持っており、第1に「サーミであること」、第2に「両親がどうやってサーミ語の利用を子どもたちに支援できるのか説明できること」を求めている。この基準で子どもを受け入れ、もし空きがあるときにフィンランド人でサーミの言葉を学びたいという家族が現れた場合は受け入れることもできるという考え方であった。

最後に、言語の巣をめぐる課題についてまとめておきたい。課題としてあげられる第1は、予算である。サーミ議会から言語の巣へ出される助成金は、サーミ議会の予算のなかから出される。そのサーミ議会の予算自体が流動的であるため、言語の巣に割かれる予算も安定せず、歴史のある言語の巣といえども、いつ助成金を打ち切られるかわからない状態にある。実際に、1993年にフィンランドで初めて作られたセヴェッティヤルヴィの言語の巣が予算確保の目処がたたないことから

半年で閉鎖されたように、過去にいくつもの言語の巣が閉園を余儀なくされてきている。

予算不足は、そのまま保育者の待遇の低さを生じさせる。サーミ議会はサーミ語を使える保育者の養成に力をいれているが、給与の安さからあまり定着しない。イナリなどにはサーミ語が使えることがメリットになる仕事が多くあるため、条件のよい仕事があると、みな言語の巣を辞めてしまうという。

給与面に限らず、保育者の確保は大きな問題である。保育者としての資格を持っているサーミ語話者を2人以上雇用することが理想であるが、なかなかうまくいかず、ヘルシンキでは保育者2人のうち、1人は資格を持っているものの、もうひとりは現在資格をとるための勉強をまだしている段階であった。セヴェッティヤルヴィの言語の巣でも、保育者が2人揃わず、われわれが訪問時に聞き取りを行った保育者は、正式な保育者が来るまでの1ヶ月限定で雇われた職員であった。セヴェッティヤルヴィのスコルト・サーミ語話者も、必ずしも全員が言語の巣の取り組みに賛成しているわけではなく、なり手が見つかりづらいためだという。サーミ語を母語として話せる人々はおおむね年齢層が高いため、今後かれらの引退により、さらなる人材不足が生じることを危惧する者もいる (Olthuis 2013: 130)。

フィンランドに限らず、サーミ学校やサーミ語教育において大きな問題とされているのが教材である。もともとサーミ語の教材は少ないため、言語の巣がスタートした当初は保育者が手作りで教材を作っていた。現在では、イナリ・サーミ語についてはイナリ・サーミ語協会が教材づくりなどを行っている。しかし、それでも、保育者の努力に依存する部分は小さくない。



写真3-1 イナリ言語の巣で使用している絵本。サーミ語の文章が貼られている。



写真3-2 イナリ言語の巣で使用している手作りのカルタ



写真3-3 セヴェッティヤルヴィ言語の巢の手作り教材

また、調査のなかで、マオリ語とイナリ・サーミ語を復活させることに成功したことから世界中に広まっていった言語の巢であるが、実際のところ成功しているといえるのはこの2例くらいであるという指摘を聞くことがあった。これについてサーミ議会の担当者に成功の理由を聞いたところ、イナリは話者が絶滅寸前にまでなっており、保育者もネイティブではなかったため、かえって各自がイナリ・サーミ語を勉強しながら努力してきた、そのモチベーションと熱意によるのではないかという返答であった。

われわれが今回、実際に訪問した言語の巢は3ヶ所であるが、「唯一の成功例」と言われるイナリの言語の巢では、保育をはじめあらゆる場面で一切フィンランド語は使わず、サーミ語しか聞かせないということが徹底されていると感じた。聞き取りをする際も、フィンランド語によるインタビューを子どもに聞かせることはできないからと、まだ園内に残っていた子どもが園庭に出たのを確認してから調査を始めさせるほどであった。それに対し、セヴェッティヤルヴィやヘルシンキでは、子どもがいる場面でも保育者たちがフィンランド語で話をしたり、また、われわれの調査も子どもたちがいる前で行ったりするということがあった。セヴェッティヤルヴィやヘルシンキの言語の巢が「失敗例」であるというわけではないし、この点については今後検証していかなければならないが、「徹底的に母語だけを使い、マジョリティの言語は排除する」という、マオリが始めた言語の巢の当初の理念を律儀に継承しているイナリと、それがゆるくなってきている他の言語の巢との違いが先の指摘につながっているとすれば、これもまた課題の1つであるといえるだろう。

第3項 調査の概要

本調査で使用するデータは、2015年にフィンランドにある5つの言語の巢で行った調査による。所在地は、イナリが2園、残りはイヴァロ、セヴェッティヤルヴィ、ヘルシンキである。

イナリ①は、1997年に作られた、現在まで存続しているなかでは最も歴史のある言語の巢である。われわれも2014年に訪問し、園長への聞き取り調査を行っている。長屋のような建物を園舎として使用しており、園庭にはサーミ伝統の家であるコタも建っている。イナリ②は2010年に設置されており、イナリ村にある言語の巢はこの2園だけである。イヴァロの言語の巢も、2010年に設置されている。先述の通り、言語の巢の多くは各自治体が運営しているが、イナリの2園とイヴァロの1園はイナリ・サーミ語協会が直接設置、運営をしている。なお、イヴァロにはもう1園、ス

コルト・サーミ語の言語の巣が存在するが、こちらは調査対象とはなっていない。

セヴェッティヤルヴィの言語の巣も、2010 年頃に設置されている。小学校の一室を借りて運営しており、現在7人の子どもを2人の保育者でみている。

ヘルシンキの言語の巣は、2013 年に都市サーミ協会の主導で設置された北サーミ語のネストである。ヘルシンキ中央駅からひと駅のパシラ地区にあり、大きなマンションの1室を利用している。また、マンション内の公園を園庭として使用している。園児数2人でスタートし、現在は7人の子どもを2人の保育者でみている。

イナリの2園とイヴァロの1園は、イナリ・サーミ語協会を通して調査を行った。イナリ・サーミ語協会へ送った調査票を保育者と保護者へ配布・回収して頂いた。また、セヴェッティヤルヴィとヘルシンキでは、言語の巣を訪問した際に調査協力を依頼し、後日 web 上に用意した調査票の URL を保育者、保護者へ伝えて頂いた。

その結果、保育者調査では5人の保育者から回答を得た。イナリ①が2人、イナリ②が1人、イヴァロが1人、残りの1人は不明である。保護者調査では9人の保護者から回答を得た。イナリ①が4人、イナリ②が2人、イヴァロが1人、ヘルシンキが1人、セヴェッティヤルヴィが1人である。

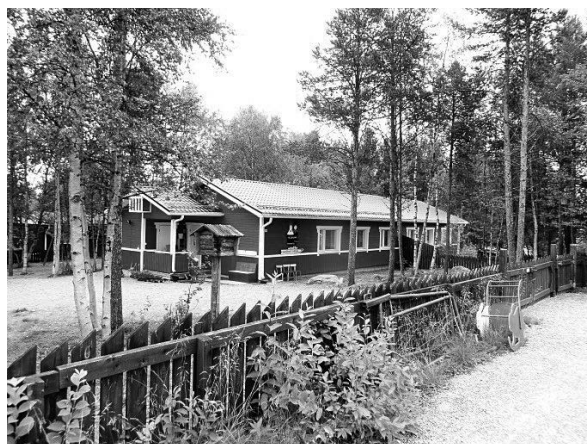


写真3-4 イナリ言語の巣①



写真3-5 イナリ言語の巣①の園庭



写真3-6 ヘルシンキ言語の巣が入っているマンション



写真3-7 ヘルシンキ言語の巣



写真3-8 セヴェッティヤルヴィ言語の巣が入っている校舎

第2節 言語の巣の保育と保育者の意識

第1項 保育者の属性とサーミ語能力

保育者は、不明の1人を除き4人全員が女性である。イナリとイヴァロの4人はいずれもイナリ出身のサーミである。Eは、自身はサーミではないと言っているものの、祖父母と配偶者はサーミであり、本人もサーミ語を使うことができる。子どもの学歴期待でもノルウェーにあるサーミ大学をあげるなど、サーミへの思いは強い。

学歴はAが基礎学校とサーミ教育専門学校、Bが基礎学校のみである。CとDは専門大学の職

業学士課程を卒業している。また、Dを除く4人は結婚を経験しているが、Aは離死別となっている。子どもがいるのはA、B、Cの3人であった。

表3-1 保育者の基本属性

		性別	年齢	出身地	あなたはサーミですか	学歴
A	イナリ①	女	NA	イナリ	サーミ	基礎学校、サーミ教育専門学校
B	イナリ①	女	50代	イナリ	サーミ	基礎学校
C	イヴァロ	女	NA	イナリ	サーミ	専門大学（職業学士課程）、サーミ教育専門学校
D	イナリ②	NA	30代	イナリ	サーミ	専門大学（職業学士課程）
E	不明	女	NA	NA	サーミではない	NA

表3-2 家族の状況

	結婚の状況	同居家族	子どもの有無	子どもの学歴期待
A	離死別	1人	いる	大学（学士課程）
B	既婚（含：事実婚）	1人	いる	専門大学（職業修士課程）
C	既婚（含：事実婚）	4人	いる	専門大学（職業学士課程）
D	未婚	NA	いない	NA
E	既婚（含：事実婚）	4人	いない	サーミ大学

全員がイナリ・サーミ語を使えるほか、Cは北サーミ語を、Eは北サーミ語とスコルト・サーミ語を使うことができる。サーミ語能力も、話すことについてはDが「かなり話せる」としたほかは「流暢に話せる」と、聞くことについてはCが「日常生活の話題がわかる」としたほかは「議会のやり取りなどがわかる」と、書くことについてはCが「簡単なメモが書ける」としたほかは「どんな文書でも書ける」としているように、概して高い。

B、Cは両親が、Aは実母が、Dは実父がそれぞれサーミ語話者であったというように、これらの能力は家庭で継承している部分が大きいようである。また、Eは先述のとおり、配偶者がサーミ語話者であった。なお、Eの祖父は、今は絶滅したといわれているケミ・サーミ語の話者であったという。

保育においてはサーミ語のみを使用する言語の巢の保育者であるが、家庭ではフィンランド語を中心とした生活をしている。また、高いサーミ語能力をすでに持っているながらも、A、B、Cの3人は現在サーミ語を習っており、D、Eも今後習いたいと考えている。

表3-3 使えるサーミ語

	使えるサーミ語	A. 話すこと	B. 読むこと	C. 聞くこと	D. 書くこと
A	イナリ・サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける
B	イナリ・サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける
C	北サーミ語、イナリ・サーミ語	流暢に話せる	本が読める	日常生活の話題がわかる	簡単なメモが書ける
D	イナリ・サーミ語	かなり話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける
E	北サーミ語、イナリ・サーミ語、スコルト・サーミ語	NA	NA	NA	NA

表3-4 家族が使えるサーミ語

	サーミ	サーミ語	北サーミ語	イナリ・サーミ語	スコルト・サーミ語	ケミ・サーミ語
A	実母、母方祖父母	実母、母方祖父母	—	—	—	—
B	実母、実父、母方祖父母、父方祖父母	実母、実父、母方祖父母、父方祖父母	—	—	—	—
C	実母、実父、継母、母方祖父母、父方祖父母、配偶者	実母、母方祖父母、父方祖父母	母方祖父	実母、母方祖父、父方祖父母	—	—
D	実父	実父	いない	実父	いない	—
E	継母、継父、母方祖父母、父方祖父母、配偶者	継母、継父、配偶者	継母、継父、母方祖父母、配偶者	継母、継父、配偶者	継母、継父、配偶者	父方祖父

表3-5 サーミ語の使用状況

	家族と話す言葉	サーミ語学習	交 流
A	フィンランド語	すでに習っている	つきあううえで、サーミかサーミでないかは意識していない
B	フィンランド語と少しのサーミ語	すでに習っている	つきあううえで、サーミかサーミでないかは意識していない
C	フィンランド語と少しのサーミ語	すでに習っている	サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらいつきあっている
D	サーミ語とフィンランド語を半々	習いたい	サーミの人々とのつきあいが多い
E	サーミ語とフィンランド語を半々	習いたい	サーミの人々とのつきあいが多い

保育者になった年はAが1982年と最も古く、Bが1999年、Cが2013年である。また、Bは1997年から、つまり、言語の巣ができた年から、言語の巣で働いている。勤務時間はおおむね7：30頃からで、退勤時間はAが14：30、Dが15：00、BとCが16：30である。

先述のとおり、言語の巣は制度上保育所ではないため、保育士の資格は必須でない。回答者のなかでも、Cはとくに免許資格を持っていないと答えている。フィンランドの保育士資格を持っていると答えたのはBだけであった。保育者になった理由を見ると、A以外の4人は「保育に携わりたかったから」をあげている。「サーミ文化に関われるから」をあげたのはAとBの2人、「サーミのために働けるから」をあげたのはBだけであり、言語の巣であるということよりは、保育に携わる仕事をしたいと思ったときに、選択肢のひとつとして言語の巣があったということが実情に近いのかもしれない。金銭的な魅力をあげたものはひとりもいなかった。

表3-6 保育者になった時期、勤務時間、免許・資格、理由、年収

	保育者になった年	言語の巣に勤務し始めた年	勤務時間	免許・資格	保育者になった理由（複数回答）								世帯年収
					1. 保育に携わったから	2. 人に勧められたから	3. 金銭的（金銭的）に魅力があったから	4. これまでのキャリアが活かせるから	5. 言語の巣の教育方針が気に入ったから	6. サーミ文化に関われるから	7. サーミのために働けるから	8. その他	
A	1982年	2013年	7.40-14.30	その他	×	×	×	○	×	○	×	×	20,000～39,999ユーロ
B	1999年	1997年	7.30-16.30	フィンランドの保育士資格	○	○	×	×	×	○	○	×	NA
C	2013年	2015年	7.30-16.30	特に免許・資格は持っていない	○	×	×	×	×	×	×	×	NA
D	NA	2014年	7.30-15.00	その他	○	×	×	×	×	×	×	×	～14,999ユーロ
E	NA	2015年	8時間	NA	○	×	×	×	×	×	×	×	NA

第2項 言語の巣での保育実態と意識

言語の巣で働く保育者たちの、言語の巣に対する評価をまとめたのが表3-7である。言語の巣最大の意義ともいえる「サーミ語を身につけられる」については全員が「そう思う」と答えている。また、「サーミの文化を身につけられる」「サーミの友だちができる」に関しても、Aが「ややそう思う」、それ以外の4人が「そう思う」と答えている。子どもの頃からサーミの言葉や文化に親しんでいくという言語の巣の第一義については、保育者たちも高く評価している。

サーミ語、文化に子どもの頃から親しんでいくことで逆に懸念されるのは、それがマジョリティであるフィンランド語、フィンランド文化やフィンランド人との隔絶を生んでしまうことである。しかし、この点について保育者たちははっきりと否定している。「サーミ以外の友だちとの関わりが少なくなる」に対してはBが「そう思う」と答えているものの、Cは「あまりそう思わない」、残る3人は「そう思わない」と回答している。「フィンランド語が覚えられない」や「フィンランドの習慣や文化に触れる機会がない」に対しても、Bだけが「そう思う」「ややそう思う」と回答し、

残る4人は「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えている。

一方、サーミに関する教育における大きな課題のひとつとしてあげられる「サーミ語の教材が整っている」については、Eが「ややそう思う」と答えているほかは4人が「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答している。フィンランドの言語の巢においても教材不足は問題として認識されている。

日本の先住民教育に関連して指摘されがちである進学や就職に関する不安は、保育者の間ではほぼ認識されていない。「進学に有利だ」に対してはDが「あまりそう思わない」と答えているほかは、4人とも「そう思う」「ややそう思う」と肯定的に捉えている。「就職に有利だ」にいたっては、全員が「そう思う」「ややそう思う」と回答している。

イナリ・サーミ語協会などにおいて指摘されているように、財源不足と不安定さは言語の巢の大きな問題の1つである。「教育設備が整っている」については、CとEが「そう思う」「ややそう思う」と、BとDが「あまりそう思わない」「そう思わない」と、意見がわかれている。しかし、「もっと公的財政支援を増やすべき」に対しては、全員が「そう思う」「ややそう思う」と、必要なこととして認識している。

言語の巢の今後の課題については、BとEの2人が「もっとサーミ文化の勉強をさせるべきだ」と考えている。また、Bは「基礎学力をもっと身につけさせるべき」という、教育的な要素にも要望を持っている。その一方で「もっとフィンランド語の勉強もさせるべきだ」、「もっと英語の勉強をさせるべきだ」と答えた者はひとりもおらず、言語の巢はサーミ語とサーミ文化に特化すべきという保育者の意思がうかがわれた。

保育者たちは仕事の内容や地域の環境には高い満足度を示しており、生活全般も含めて、全員が「満足」ないし「どちらかといえば満足」と回答している。一方で収入に対しては、無回答のEを除くと全員が「不満」もしくは「どちらかといえば不満」と回答している。第1節でもふれたように、言語の巢はただでさえサーミ語を使えなければならないという条件があるため、保育者が見つけづらい。そのようななかで、予算不足から給与がなかなか上がらず、せっかく見つけた保育者が定着しないという課題を抱えている。ここで見た保育者の意識は、それを裏付け、保育環境が定着しない恐れを危惧させるものである。

表3-7 言語の巢に関する評価

	A. サーミ語を身に付けられる	B. サーミ語で保育するので理解しやすい	C. サーミの文化を身に付けられる	D. サーミの友だちができる	E. サーミ以外の友だちとの関わりが少なくなる	F. フィンランド語が覚えられない
A	そう思う	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う	そう思わない	そう思わない
B	そう思う	NA	そう思う	そう思う	そう思う	ややそう思う
C	そう思う	NA	そう思う	そう思う	あまりそう思わない	あまりそう思わない
D	そう思う	NA	そう思う	そう思う	そう思わない	そう思わない
E	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	そう思わない	あまりそう思わない

	G. フィンランドの習慣や文化に触れる機会がない	H. 教育設備が整っている	I. サーミ語の教材が整っている	J. 進学に有利だ	K. 就職に有利だ	L. もっと公的財政支援を増やすべき
A	そう思わない	NA	そう思わない	ややそう思う	ややそう思う	そう思う
B	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	そう思う	そう思う	そう思う
C	そう思わない	そう思う	あまりそう思わない	そう思う	そう思う	ややそう思う
D	あまりそう思わない	そう思わない	あまりそう思わない	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う
E	あまりそう思わない	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う	そう思う	そう思う

表3-8 言語の巢に関する意見

	1. もっとサーミ文化の勉強をさせるべきだ	2. 基礎学力をもっと身につけさせるべきだ	3. もっとフィンランド語の勉強もさせるべきだ	4. もっと英語の勉強をさせるべきだ	5. 特に考えはない
A	×	×	×	×	○
B	○	○	×	×	×
C	×	×	×	×	○
D	×	×	×	×	○
E	○	×	×	×	×

表3-9 満足度

	A. 仕事内容	B. 収入	C. 地域の環境	D. 生活全般
A	どちらかといえば満足	不満	満足	どちらかといえば満足
B	どちらかといえば満足	どちらかといえば不満	満足	どちらかといえば満足
C	満足	どちらかといえば不満	満足	満足
D	どちらかといえば満足	どちらかといえば不満	満足	どちらかといえば満足
E	どちらかといえば満足	NA	NA	NA

第3項 保護者との関係

A、B、Dは、たまに保護者から相談を受けると答えている。相談内容は、「言語の巢の保育内容について」（B、D）という、言語の巢特有のものから、「子どもへの接し方」「家庭での教育について」「子どもの進路について」といった、言語の巢に限らない保育全般に関するものまである。CとEは相談を受けることが「あまりない」と答えているが、これは必ずしも保護者とのコミュニケーションが取れていないということではない。「園の行事にもっと参加してほしい」はD以外が「少しそう思う」「とてもそう思う」と回答しているものの、「子どもの教育に関して話しあう機会がほしい」に対してはEが「とてもそう思う」と回答している以外は全員が「あまりそう思わない」と答えている。

保護者への要望として目立つのは、「家庭でもサーミ語を使用してほしい」という、サーミ語関係の問題であった。「子どもを園に任せきりにしないでほしい」はA、B、Eが「とてもそう思う」「ややそう思う」と、CとDが「まったくそう思わない」と、意見がわかれている。同様に、「保護者同士がもっと互いに関わり合ってほしい」も、A、Eが「少しそう思う」「とてもそう思う」と、B、C、

Dが「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」と、意見の分化が見られる。保護者との関係については、サーミ語教育や種々の取り組みについて積極的な参加を期待する一方で、それ以外の部分についてはとくに不満や課題を感じていないようである。

表3-10 保護者からの相談（複数回答）

	保護者からの相談	1. 子どもへの接し方について	2. 家庭での教育について	3. 言語の巢の保育内容について	4. 保育士の子どもへの接し方について	5. 子どもの進路について	6. その他
A	たまにある	○	×	×	×	○	×
B	たまにある	○	○	○	×	×	×
C	あまりない	—	—	—	—	—	—
D	たまにある	×	×	○	×	×	×
E	あまりない	—	—	—	—	—	—

表3-11 保護者への要望

	A. 子どもの教育に関して話しあう機会がほしい	B. 園の行事にもっと参加してほしい	C. 家庭でもサーミ語を使用してほしい	D. 子どもを園に任せきりにしないでほしい	E. 保護者同士がもっと互いに関わり合ってほしい
A	あまりそう思わない	少しそう思う	とてもそう思う	とてもそう思う	少しそう思う
B	あまりそう思わない	少しそう思う	とてもそう思う	少しそう思う	まったくそう思わない
C	あまりそう思わない	少しそう思う	とてもそう思う	まったくそう思わない	あまりそう思わない
D	あまりそう思わない	あまりそう思わない	とてもそう思う	まったくそう思わない	あまりそう思わない
E	とてもそう思う	とてもそう思う	とてもそう思う	とてもそう思う	とてもそう思う

第4項 保育者の将来観と社会観

言語の巢に勤務することは、BやD、Eにとって、サーミであることへの誇りを強める働きを持っていた。BとEは自身の将来について、「サーミとして積極的に生活していきたい」と答えている。自身の将来については、BとEに対してA、C、Eは「とくに民族は意識せず生活していきたい」と考えている。一方で、子どもたちの将来については、AとEも含めて、C以外の4人が「サーミとして積極的に生活してほしい」と望んでいる。

サーミに対する差別については、BとEが「ある」と、残りの3人が「自分に対してはないが、他の人が受けたことを知っている」と回答している。なお、差別の内容としては、「いじめ」をあげる者がいたほか、歴史的に言葉の使用を制限されてきたことなどがあげられている。そもそも、フィンランド社会には「人種・民族による不公平」があると、全員が考えている。もっとも、Cが「職業による不公平」と「所得・資産による不公平」は「あまりない」と回答しているほかは、ほぼ全員が人種・民族以外の性別、学歴、職業、所得・資産、家柄による不公平も存在すると考えている。

社会のサーミ政策については、「差別が起こらない社会」「サーミ語、サーミ文化を守るべき」「サーミへの教育支援を拡充すべき」「サーミに関する正しい理解を促進すべき」「国会のラップ県の議席数を増やすべき」「国家予算のうち、サーミ関連予算を増やすべき」が全員に重要であると認識されている。とくに文化保護と理解の促進は、全員が「とても重要」で一致した意見を持っていた。また、先住民族にかかわる問題で、もっともナーバスなものともいえ、意見が分かれる「サーミの土地・資源に対する補償をすべき」についても、Dが無回答であるほかは「ある程度重要」「とても重要」と認識されている。

意見がわかれているものとしては、「サーミに対する経済的援助を拡充すべき」や「サーミ議会の権限を拡大すべき」などがあった。特別なことはすべきでないという考え方も根強くBとCは

「サーミのみを対象とする特別の施策は行うべきでない」と考えていた。

表3-12 サーミの意識、将来期待、サーミ差別、サーミ議会選挙名簿

	言語の巢の勤務とサーミ自意識	子どもたちの将来期待	自身の将来期待	差 別	サーミ議会
A	特に変わらない	サーミとして積極的に生活してほしい	特に民族は意識せず生活していきたい	自分に対してはないが、他の人が受けたことを知っている	登録している
B	サーミであることを誇りに思うことが増えた	サーミとして積極的に生活してほしい	サーミとして積極的に生活していきたい	ある	登録している
C	特に変わらない	特に民族は意識せず生活してほしい	特に民族は意識せず生活していきたい	自分に対してはないが、他の人が受けたことを知っている	登録している
D	サーミであることを誇りに思うことが増えた	サーミとして積極的に生活してほしい	サーミとして積極的に生活していきたい	自分に対してはないが、他の人が受けたことを知っている	NA
E	サーミであることを誇りに思うことが増えた	サーミとして積極的に生活してほしい	特に民族は意識せず生活していきたい	ある	登録する権利を持っていない

表3-13 不公平感

	A. 性別による不公平	B. 学歴による不公平	C. 職業による不公平	D. 所得・資産による不公平	E. 家柄による不公平	F. 人種・民族による不公平
A	よくある	少しある	少しある	よくある	少しある	少しある
B	少しある	少しある	少しある	少しある	少しある	少しある
C	少しある	少しある	あまりない	あまりない	少しある	よくある
D	少しある	少しある	少しある	少しある	少しある	少しある
E	よくある	よくある	よくある	よくある	よくある	よくある

表3-14 サーミ政策等への意見

	A. サーミへの差別が起こらない社会をつくるべき	B. サーミ語、サーミ文化を守るべき	C. サーミに対して雇用政策を拡充すべき	D. サーミへの教育支援を拡充すべき	E. サーミに対する経済的援を拡充すべき	F. サーミの土地・資源に対する補償をすべき
A	とても重要	とても重要	あまり重要でない	とても重要	あまり重要でない	ある程度重要
B	ある程度重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要
C	とても重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	あまり重要でない	ある程度重要
D	とても重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要	NA
E	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	ある程度重要	とても重要

	G. サーミに関する正しい理解を促進すべき	H. サーミ議会の権限を拡大すべき	I. 国会のラッピ県の議席数を増やすべき	J. 国家予算のうちサーミ関連予算を増やすべき	K. サーミのみを対象とする特別の施策はこなうべきではない
A	とても重要	NA	ある程度重要	とても重要	NA
B	とても重要	あまり重要でない	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要
C	とても重要	ある程度重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要
D	とても重要	ある程度重要	とても重要	とても重要	NA
E	とても重要	まったく重要でない	とても重要	とても重要	まったく重要でない

第3節 言語の巢を利用する保護者の意識

第1項 保護者の属性とサーミ語能力

9人の回答者のうち、7人が母親で2人が父親である。年齢は20代が2人、30代が4人、40代が2人、不明が1人である。入園している園児の人数は、1人が6人、2人が3人である。

イヴァロの言語の巢を利用するNが「サーミではない」と答えているほかは、全員がサーミである。ただし、N自身はサーミ語が使えるほか、両親もサーミである。出身地はおおむね、通っている言語の巢の所在地である。Lだけは、ウツヨキ出身で、現在ヘルシンキの言語の巢を使用している。最終学歴は概して高く、Gが職業学校、HとIが「その他」と回答しているほかは、全員が大学も

しくは専門大学まですすんでいる。修士課程まで進んだ者も2人いた。サーミ教育専門学校に通ったことのある者はI、J、Kの3人であった。

職業では公務員が多く、4人にのぼる。他に教員が1人、看護師が1人、店員・販売員が1人、その他が2人であった。最も長く従事している仕事も大きくは変わらない。教員という者が2人、トナカイ飼育が1人であった。世帯年収は20,000～39,999ユーロが2人、40,000～69,999ユーロが4人、70,000ユーロ以上が2人である。

サーミのシンボルでもあるトナカイについては、「現在飼っている」が2人、「かつて飼っていた」が2人、「飼っていない」が4人である。自分自身については、所有しているのはI、M、Nの3人であった。しかし、MとNは、トナカイによる収入は家計の25%程度であるとし、Iにいたっては家計の足しにはならないということであった。

表3-15 保護者の基本属性

	関係	年齢	言語の果	第1子 年齢	第1子 入園年齢	第2子 年齢	第2子 入園年齢	あなたはサーミ ですか	出身地	学歴	SEI
F	母	40代	イナリ①	5歳	2歳	—	—	サーミ	イナリ	大学(学士課程)、専門大学(職業学士課程)	
G	父	20代	イナリ①	4歳	4歳	3歳	2歳	サーミ	イナリ	職業学校(Sami Education Institute以外)	
H	母	30代	イナリ①	2歳	1歳	—	—	サーミ	イナリ	その他	
I	母	20代	イナリ①	2歳	1歳半	—	—	サーミ	その他	その他	○
J	母	30代	イナリ②	4歳	2歳	2歳	2歳	サーミ	イナリ	専門大学(職業学士課程)	○
K	母	30代	イナリ②	5歳	NA	—	—	サーミ	イナリ	専門大学(職業学士課程)	○
L	父	40代	ヘルシンキ	4歳	2歳	1歳	1歳	サーミ	ウツヨキ	大学(学士課程)	
M	母	30代	セヴェッティヤルヴィ	6歳	0歳	—	—	サーミ	セヴェッティヤルヴィ	大学(修士課程)	
N	母	NA	イヴァロ	6歳	1歳	—	—	サーミではない	NA	大学(修士課程)	

注) SEIはサーミ教育専門学校 (Sami Education Institute) のこと。

表3-16 職業、年収、トナカイ飼育

	現在の職業	もっとも長い職業	世帯年収	家族のトナカイ飼育	自身のトナカイ所有	トナカイ収入
F	教員	教員	20,000～39,999ユーロ	かつて飼っていた	所有していない	—
G	公務員	公務員	40,000～69,999ユーロ	飼っていない	所有していない	—
H	その他	会社の事務や営業職	NA	かつて飼っていた	所有していない	—
I	その他	トナカイ飼育	20,000～39,999ユーロ	現在飼っている	所有している	家計の足しにはならない
J	看護師	看護師	40,000～69,999ユーロ	飼っていない	所有していない	—
K	店員・販売員	店員・販売員	40,000～69,999ユーロ	飼っていない	所有していない	—
L	公務員	公務員	70,000～89,999ユーロ	飼っていない	所有していない	—
M	公務員	教員	90,000～119,999ユーロ	現在飼っている	所有している	家計の25%をしめる
N	公務員	公務員	40,000～69,999ユーロ	NA	所有している	家計の25%をしめる

サーミ語は、Gが使えないとしているほかは、みな使うことができる。北サーミ語のみ使える者が1人、イナリ・サーミ語のみを使える者が3人で、HとI、Nの3人は北サーミ語とイナリ・サーミ語の両方を使うことができる。さらに、Mにいたってはスコルト・サーミ語を含めた3つのサーミ語方言を使うことができるという。

家庭での使用言語は、「サーミ語とフィンランド語を半々」が2人、「サーミ語と少しのフィンランド語」が3人、「フィンランド語と少しのサーミ語」が3人、その他が1人であった。フィンランド語しか使わない、あるいはサーミ語しか使わないという家庭はなく、家庭内でも程度の差こそあれ、サーミ語が日常的に使用されていることがわかる。なお、家庭での言語の使用状況とサーミ語の能力との間には、とくに関連はないようである。また、G、I、Kを除く6人は実母か実父のいずれか、もしくは双方がサーミ語を使用できる。家庭におけるサーミ語の継承がある程度は行われ

ているようである。

ただし、サーミ語の継承は家庭だけでは完結しておらず、3人は現時点でサーミ語を習っているし、5人は習いたいと考えている。「十分なサーミ語能力があるので、習う必要はない」という者はひとりしかいなかった。

表3-17 自身が使えるサーミ語

	自身が使えるサーミ語	最も得意なサーミ語の能力				家族と話す言語	サーミ語学習意思
		A. 話すこと	B. 読むこと	C. 聞くこと	D. 書くこと		
F	イナリ・サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける	サーミ語と少しのフィンランド語	すでに習っている
G	話せない	—	—	—	—	フィンランド語と少しのサーミ語	習いたい
H	北サーミ語、イナリ・サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける	その他	すでに習っている
I	北サーミ語、イナリ・サーミ語	かなり話せる	本が読める	日常生活の話題がわかる	簡単なメモが書ける	サーミ語とフィンランド語を半々	すでに習っている
J	イナリ・サーミ語	簡単な内容なら話せる	文字が読める	簡単なことならわかる	文字がかけられる	フィンランド語と少しのサーミ語	習いたい
K	イナリ・サーミ語	簡単な内容なら話せる	簡単な雑誌が読める	日常生活の話題がわかる	簡単なメモが書ける	フィンランド語と少しのサーミ語	習いたい
L	北サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける	サーミ語と少しのフィンランド語	十分なサーミ語能力があるので、習う必要はない
M	北サーミ語、イナリ・サーミ語、スコット・サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける	サーミ語と少しのフィンランド語	習いたい
N	北サーミ語、イナリ・サーミ語	かなり話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	簡単なメモが書ける	サーミ語とフィンランド語を半々	習いたい

表3-18 家族が使えるサーミ語

	サーミ	サーミ語
F	実父、父方祖父母、その他	実父(不明)、父方祖父母(不明)
G	実母、母方祖父母、配偶者、配偶者の母、配偶者の父	母方祖父母(イナリ)、配偶者(北・イナリ)、配偶者の母(イナリ・スコット)
H	実母、母方祖母	実母(北・イナリ)、母方祖母(北・イナリ)
I	実母、母方祖母	その他(イナリ)
J	母方祖父	実母(不明)
K	実母、実父、母方祖父母、父方祖父母	その他(不明)
L	父方祖母	実母(北)、実父(北)、父方祖母(北)、配偶者(北)
M	実父、父方祖父母、配偶者、配偶者の父、配偶者の母	実父(スコット)、父方祖父母(不明)、配偶者(北・イナリ・スコット)、配偶者の父(不明)
N	実父、父方祖父母、配偶者、配偶者の父、配偶者の母	実母(北・イナリ)

第2項 言語の巢を利用する保護者の意識

第4章で取り上げる基礎学校と異なり、言語の巢は、保育機関のなかから保護者が選択して利用するものである。

言語の巢を選んだ理由としては、「サーミ語が身につくから」(6人)、「サーミ文化が身につくから」(5人)を選ぶ者が多い。また、「子どもにサーミの友だちができるから」、「サーミの人々と交流したいから」も3人ずつから選ばれている。「サーミ関連以外の部分の保育内容が気に入ったから」や「保育士が親切だから」といった項目を選ぶ者はいなかった。「自分自身も通っていたから」「家族が通っていたから」といった理由を選択する者もおらず、保護者がサーミに関することに特化して言語の巢を積極的に選択していることがわかる。

言語の巢を選択する理由になった事柄について、では実際に入園してみてどうだったのか。①サーミ語・文化を身につけることへの評価、②マジョリティ社会との隔絶に関する問題、③施設としての評価、④将来に関する問題の4点それぞれについて、保護者たちの評価を確認する。

表3-20を見ると、1点目については、「サーミ語を身につけられる」「サーミ語で学ぶので理解しやすい」「サーミの文化を身につけられる」「サーミの友だちができる」といったことは、全員が「そう思う」(Nのみ、「サーミ文化を身につけられる」と「サーミの友だちができる」に「ややそう思う」と肯定的な評価をしている。この点については、保護者の間にまったく不満はないようである。

次に、2点目については、「サーミ以外の友だちとの関わりが少なくなる」に対してIとLが「ややそう思う」という危惧を抱いているほかは、「フィンランド語が覚えられない」「フィンランドの習慣や文化に触れる機会がない」のいずれに対しても全員が「あまりそうは思わない」「そう思わない」と回答しているように、問題としてはまったく認識されていない。

3点目の施設に関しては、やや評価がわかれてくる。「教育設備が整っている」については、「ややそう思う」「そう思う」が5人、「あまりそうは思わない」「そう思わない」が2人と、どちらかといえば満足している意見が強い。これが、「サーミ語の教材が整っている」になると、「ややそう思う」「そう思う」が4人、「あまりそうは思わない」「そう思わない」が5人と、評価が二分されてきている。このようなこともあってか、あるいは言語の巢にかかわる財政基盤の弱さ、不安定さを知っているか、「もっと公的財政支援を増やすべき」に対しては、全員が「そう思う」「ややそう思う」と回答している。

最後に4点目の将来についてである。「進学に有利だ」と「就職に有利だ」に対しては、無回答のHを除く全員が「ややそう思う」「そう思う」と回答しており、サーミ語、サーミ文化に深く関わるものが人生の選択においてマイナスになることはないといえられている。このことは表3-21からも見て取ることができる。「サーミホームランド以外の地域へ進学する際には不利になる」「サーミホームランド以外の地域へ就職する際には不利になる」「サーミホームランド以外の地域で生活する際には不利になる」の3項目に対しては、全員が「そう思わない」と断言している。

このように、保護者たちはサーミ語、サーミ文化を学ぶことを高く評価し、またそれがマジョリティ社会との隔絶を招いたり、あるいは将来を不利にさせたりすることがあるとはまったく考えていない。このことは、言語の巢への要望を見てもわかる。「もっとサーミ文化の勉強をしてほしい」という者が4人いるのに対し、「基礎学力をもっと身につけてほしい」と答えた者は1人しかおらず、「フィンランド語の保育もしてほしい」「英語の保育をしてほしい」という者は1人もいなかった。結果として、言語の巢への満足度は大変高く、6人が「大変満足している」、3人が「どちらかといえば満足している」と答えている。

なお、進路に関連しては、学歴期待と将来の居住地に関する答えも見ておきたい。子どもに期待する学歴としては、LとNの2人が大学(修士課程)、FとJとKが専門大学であった。Mはノルウェーのサーミ大学をあげている。その他としては、本人の望むところへという意見があった。先述の通り、イナリには高等教育機関がないため、大学等へ進学するためには地域を出る必要がある。保護者のなかでは、Mが「現在住んでいるところに住み続けてほしい」、JとKが「ラップ県内にはいてほしい」と答えているが、4人は「どこに住んでも構わない」と回答していた。言語の巢を利用するからと

いて、必ずしも地元でサーミとして生活してほしいと考えているわけではないようである。

表3-19 言語の巢を選んだ理由（複数回答）

	1.サーミ語が身につくから	2.サーミ文化が身につくから	3.保育士が親切だから	4.サーミ関連以外の部分の保育内容が気に入ったから	5.子どもにサーミの友だちができるから	6.サーミの人々と交流したいから	7.近所だから	8.自分自身も通っていたから	9.家族が通っていたから	10.特に理由はない	11.その他
F	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○
G	○	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×
H	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
I	○	○	×	×	○	○	○	×	×	×	×
J	○	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×
K	○	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×
L	○	○	×	×	○	×	○	×	×	×	×
M	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○
N	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

表3-20 言語の巢の評価

	A.サーミ語を身につけられる	B.サーミ語で学ぶので理解しやすい	C.サーミの文化を身につけられる	D.サーミの友だちができる	E.サーミ以外の友だちとの関わりが少なくなる	F.フィンランド語が覚えられない
F	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	あまりそうは思わない	あまりそうは思わない
G	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	そう思わない	そう思わない
H	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	あまりそうは思わない	あまりそうは思わない
I	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	ややそう思う	そう思わない
J	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	あまりそうは思わない	そう思わない
K	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	あまりそうは思わない	そう思わない
L	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	ややそう思う	そう思わない
M	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	そう思わない	そう思わない
N	そう思う	そう思う	ややそう思う	ややそう思う	そう思わない	NA

	G.フィンランドの習慣や文化に触れる機会がない	H.教育設備が整っている	I.サーミ語の教材が整っている	J.進学に有利だ	K.就職に有利だ	L.もっと公的財政支援を増やすべき
F	あまりそうは思わない	ややそう思う	そう思わない	ややそう思う	そう思う	そう思う
G	そう思わない	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う
H	あまりそうは思わない	NA	そう思わない	NA	NA	そう思う
I	そう思わない	あまりそうは思わない	そう思わない	そう思う	そう思う	そう思う
J	そう思わない	そう思う	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う
K	そう思わない	そう思う	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う
L	そう思わない	そう思わない	ややそう思う	ややそう思う	そう思う	そう思う
M	そう思わない	ややそう思う	そう思わない	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う
N	そう思わない	NA	そう思わない	ややそう思う	そう思う	そう思う

表3-21 サーミ語で／を学ぶことについて、言語の巢への要望、満足度

サーミ語で／を学ぶことについて			言語の巢への要望（複数回答）							言語の巢への満足度
A.サーミホームランド以外の地域へ進学する際には不利になる	B.サーミホームランド以外の地域で就職する際には不利になる	C.サーミホームランド以外の地域で生活する際には不利になる	1.もっとサーミ文化の勉強をしてほしい	2.基礎学力をもっと身につけてほしい	3.フィンランド語の保育もしてほしい	4.英語の保育もしてほしい	5.先生にもっと熱心にしてほしい	6.特に要望はない	7.その他	
F そう思わない	そう思わない	そう思わない	○	×	×	×	○	×	×	どちらかといえば満足している
G そう思わない	そう思わない	そう思わない	×	×	×	×	○	×	○	大変満足している
H そう思わない	そう思わない	そう思わない	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	大変満足している
I そう思わない	そう思わない	そう思わない	×	×	×	×	×	○	×	どちらかといえば満足している
J そう思わない	そう思わない	そう思わない	○	○	×	×	○	×	×	どちらかといえば満足している
K そう思わない	そう思わない	そう思わない	○	×	×	×	○	×	×	大変満足している
L そう思わない	そう思わない	そう思わない	×	×	×	×	×	○	×	大変満足している
M そう思わない	そう思わない	そう思わない	○	×	×	×	○	×	○	大変満足している
N そう思わない	そう思わない	そう思わない	×	×	×	×	×	×	○	大変満足している

表3-22 将来期待

	学歴期待	居住地期待
F	専門大学（職業修士課程）	どこに住んでも構わない
G	その他	その他
H	NA	NA
I	その他	どこに住んでも構わない
J	専門大学（職業学士課程）	ラップ県内にはいてほしい
K	専門大学（職業学士課程）	ラップ県内にはいてほしい
L	大学（修士課程）	どこに住んでも構わない
M	サーミ大学	現在住んでいるところに住み続けてほしい
N	大学（修士課程）	どこに住んでも構わない

第3項 サーミとしての意識

本項では、「サーミではない」と考えているNを除いた8人を対象に、サーミとしての自意識やサーミに対する考え方を検討する。

自身がサーミであることを、「つねに意識している」者は5人、「意識することが多い」者は2人、「時々意識する」者は1人である。意識する場面としては、「サーミのことを話題にするとき」（6人）や「サーミの文化を実践するとき」（6人）、「サーミの人々と関わる時」（6人）、「文化や歴史に触れたとき」（6人）、「サーミ語に触れたとき」（6人）をあげる者が多い。「サーミの人々の身体的特徴に気づいたとき」をあげる者はひとりしかいなかった。

サーミとしての自覚をしたのは、「小学校入学前」が3人、「小学生の頃」が2人、「中学生の頃」が2人、「いつごろかわからない」が1人と、特定の時期への偏りは見られない。自覚したきっかけは圧倒的に「親から聞いた」（6人）が多く、近所の人から、友だちから、学校の先生から、身体的特徴からといった者はひとりもいなかった。

Gを除く7人は、子どもの頃から家庭においてサーミ文化を経験している。また、Kは子どもの頃のサーミ以外の人々との関わりが「なかった」と答えているが、残りの7人は「仲良くつきあっていた」という。

子育てをするようになったことは、5人の保護者の民族意識に影響を与えており、「サーミであることを誇りに思うことが増えた」と答えている。

自らが、家庭においてサーミの文化や意識を継承してきたように、保護者たちは家庭にサーミの文化を取り入れることで子ども世代への継承を行っており、全員が家庭でサーミ文化を子どもに見せたり伝えたりしている。「サーミの言葉で話す」（8人全員）、「サーミの絵本を読む」（7人）、「サー

ミの料理」(7人)、「サーミの手工芸」(6人)などがとくに実践されている。これらに比べると「サーミの昔話」(4人)や「トナカイの放牧」(3人)はさほど多くは行われていない。

サーミ差別については、3人が「ある」と、2人が「自分に対してはないが、他の人が受けたことを知っている」と、3人が「ない」と答えている。ただし、「人種・民族による不公平」は、サーミではないNも含めて全員が「少しある」あるいは「よくある」と回答しており、サーミであることが不利益をもたらす場面があることを示している。もっとも、不公平があると考えられているのは人種・民族だけではない。不公平が「よくある」「少しある」と考えている者は「所得・資産」(8人)「家柄」(8人)「性別」(7人)「学歴」(7人)「職業」(6人)などでも多く、フィンランド社会に多く存在する不公平のうち、所得・資産によるものや家柄によるものと同様に、人種・民族に関する不公平も存在すると認識されているようだ。

サーミ議会の選挙人名簿に登録している者は7人で、現在登録していないGも登録するつもりであるという。また、今後については、Fが「とくに民族は意識せずに生活していきたい」と答えているほかは、全員が「サーミとして積極的に生活していきたい」と答えている。

表3-23 サーミとしての意識

		1.家族でサーミのことを話題にするとき	2.家族でサーミの文化を実践するとき	3.家族以外のサーミの人々と関わる時	4.サーミ以外の人々に関わる時	5.サーミの文化や歴史に触れたとき	6.サーミ語に触れたとき	7.サーミの人々の身体的特徴に気づいたとき	8.サーミであることで差別を受けたとき	9.その他
F	意識することが多い	○	○	○	×	○	○	×	×	×
G	つねに意識している	○	○	○	×	○	○	×	×	×
H	つねに意識している	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
I	つねに意識している	○	○	○	○	○	○	×	×	×
J	時々意識する	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K	意識することが多い	○	○	○	×	○	○	×	×	×
L	つねに意識している	○	○	○	○	○	○	×	○	○
M	つねに意識している	○	○	○	○	○	○	○	×	×

表3-24 サーミ意識の芽生え

		1.親から聞いた	2.親以外の家族・親戚から聞いた	3.近所の人から聞いた	4.友だちから指摘された	5.学校の先生に指摘された	6.身体的特徴に気づいた	7.その他
F	いつごろかわからない	×	○	×	×	×	×	×
G	13～15歳くらい（おおそ中学生の頃）	○	×	×	×	×	×	×
H	7歳になる前（おおそ小学校入学前）	×	×	×	×	×	×	○
I	7～12歳くらい（おおそ小学生の頃）	○	×	×	×	×	×	×
J	7～12歳くらい（おおそ小学生の頃）	○	×	×	×	×	×	×
K	13～15歳くらい（おおそ中学生の頃）	○	×	×	×	×	×	×
L	7歳になる前（おおそ小学校入学前）	○	×	×	×	×	×	×
M	7歳になる前（おおそ小学校入学前）	○	×	×	×	×	×	×

表3-25 自身のサーミ文化経験

	子どもの頃の、家庭内文化体験	子どもの頃のサーミ以外の人々との関わり	現在の人間関係	サーミとしての自覚に対する子育ての影響
F	ある	仲良くつきあっていた	サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらいつきあっている	サーミであることを誇りに思うことが増えた
G	ない	仲良くつきあっていた	サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらいつきあっている	特に変わらない
H	ある	仲良くつきあっていた	つきあううえで、サーミかサーミでないかは意識していない	サーミであることを誇りに思うことが増えた
I	ある	仲良くつきあっていた	サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらいつきあっている	サーミであることを誇りに思うことが増えた
J	ある	仲良くつきあっていた	つきあううえで、サーミかサーミでないかは意識していない	サーミであることを誇りに思うことが増えた
K	ある	関わりがなかった	サーミ以外の人々とのつきあいが多い	特に変わらない
L	ある	仲良くつきあっていた	サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらいつきあっている	サーミであることを誇りに思うことが増えた
M	ある	仲良くつきあっていた	サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらいつきあっている	特に変わらない

表3-26 現在のサーミ文化実践（複数回答）

	現在の家庭のサーミ文化	1.サーミの言葉で話す	2.サーミの絵本を読む	3.サーミの昔話	4.サーミの手工芸	5.サーミの料理	6.トナカイの放牧	7.その他
F	ある	○	○	○	○	○	×	×
G	ある	○	×	×	×	○	×	×
H	ある	○	○	×	○	○	×	○
I	ある	○	○	×	○	○	○	○
J	ある	○	○	○	○	○	○	×
K	ある	○	○	×	×	×	×	×
L	ある	○	○	○	○	○	×	×
M	ある	○	○	○	○	○	○	×

表3-27 サーミ差別、サーミ議会選挙名簿、今後の生き方

	サーミ差別	サーミ議会選挙人名簿	今後の生き方
F	ある	登録している	特に民族は意識せず生活していきたい
G	ない	登録していないが登録するつもり	サーミとして積極的に生活していきたい
H	自分に対してはないが、他の人が受けたことを知っている	登録している	サーミとして積極的に生活していきたい
I	自分に対してはないが、他の人が受けたことを知っている	登録している	サーミとして積極的に生活していきたい
J	ない	登録している	サーミとして積極的に生活していきたい
K	ない	登録している	サーミとして積極的に生活していきたい
L	ある	登録している	サーミとして積極的に生活していきたい
M	ある	登録している	サーミとして積極的に生活していきたい

表3-28 不公平感

	A.性別による不公平	B.学歴による不公平	C.職業による不公平	D.所得・資産による不公平	E.家柄による不公平	F.人種・民族による不公平
F	少しある	少しある	少しある	よくある	少しある	少しある
G	よくある	よくある	よくある	よくある	よくある	よくある
H	よくある	よくある	よくある	よくある	よくある	よくある
I	少しある	少しある	少しある	少しある	少しある	少しある
J	よくある	よくある	よくある	少しある	少しある	少しある
K	少しある	少しある	よくある	よくある	少しある	少しある
L	あまりない	少しある	あまりない	少しある	よくある	よくある
M	あまりない	あまりない	あまりない	あまりない	あまりない	よくある
N	よくある	あまりない	あまりない	少しある	少しある	少しある

第4項 サーミ政策に対する意識

サーミ政策に対する要望は、こちらであげたいずれの項目も重視されている。なかでも重要だと思われるのは「サーミへの差別が起こらない社会をつくるべき」と「サーミ語、サーミ文化を

守るべき」であり、全員が「とても重要」と回答している。また、「サーミへの教育支援を拡充すべき」と「サーミに関する正しい理解を促進すべき」「国家予算のうちサーミ関連予算を増やすべき」も重視している者が多い。

「とても重要」と「ある程度重要」の違いを優先度の差と解釈するならば、重要でありつつも優先順位が下がるものは、「サーミに対して雇用政策を拡充すべき」（「ある程度重要」が3人、「あまり重要でない」が1人）や「サーミの土地・資源に対する補償をすべき」（「ある程度重要」が5人）、「サーミに対する経済援助を拡充すべき」（「ある程度重要」が4人、「あまり重要でない」が1人）、「サーミ議会の権限を拡大すべき」（「ある程度重要」が6人）、「国会のラッピ県の議席を増やすべき」（「ある程度重要」が2人、「あまり重要でない」が1人、「まったく重要でない」が1人）となっている。

概して、サーミの権利に関するもの、教育に関するものの優先順位が高く、直接的な援助に関するもの、政治的な発言機会に関するものが、重要性は認められつつも「ある程度」がつきやすくなっているようである。マイノリティの中には、特別な政策をされることを嫌がる者も多いが、「サーミのみを対象とする特別の施策は行うべきではない」という考えが重要とする者は3人、「重要でない」とする者は4人であった。

現状に対する満足度を見ると、収入に対しては「どちらかといえば不満」とする者が4人とやや多くなっている。また、仕事内容についても、Kが「どちらかといえば不満」としているほか、地域の自然環境に関しても、Lが「どちらかといえば不満」と感じている。ただし、仕事や収入をはじめとした不満は持ちつつも、生活全般については全員が「満足」「どちらかといえば満足」と答えているように、大きな不満はないようである。

表3-29 サーミ政策等

	A.サーミへの差別 が起こらない社会を つくるべき	B.サーミ語、サーミ 文化を守るべき	C.サーミに対して雇 用政策を拡充すべ き	D.サーミへの教育 支援を拡充すべき	E.サーミに対する経 済的援助を拡充す べき	F.サーミの土地・資 源に対する補償を すべき
F	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	ある程度重要	とても重要
G	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	ある程度重要
H	とても重要	とても重要	ある程度重要	とても重要	ある程度重要	NA
I	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	ある程度重要
J	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要
K	とても重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要
L	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	あまり重要でない	ある程度重要
M	とても重要	とても重要	あまり重要でない	とても重要	とても重要	とても重要
N	とても重要	とても重要	ある程度重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要

	G.サーミに関する正 しい理解を促進す べき	H.サーミ議会の権 限を拡大すべき	I.国会のラッピ県の 議席数を増やすべ き	J.国家予算のうち サーミ関連予算を 増やすべき	K.サーミのみを対象 とする特別の施策は おこなうべきでは ない
F	とても重要	ある程度重要	とても重要	とても重要	あまり重要でない
G	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要	とても重要
H	とても重要	ある程度重要	とても重要	とても重要	NA
I	とても重要	ある程度重要	とても重要	とても重要	NA
J	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要
K	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要
L	とても重要	とても重要	まったく重要でない	とても重要	まったく重要でない
M	とても重要	とても重要	あまり重要でない	とても重要	まったく重要でない
N	とても重要	ある程度重要	とても重要	とても重要	まったく重要でない

表 3-30 満足度

	A. 仕事内容	B. 収入	C. 地域の自然環境	D. 生活全般
F	満足	どちらかといえば不満	満足	どちらかといえば満足
G	満足	どちらかといえば不満	満足	満足
H	NA	NA	NA	NA
I	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	満足	どちらかといえば満足
J	満足	どちらかといえば不満	満足	満足
K	どちらかといえば不満	どちらかといえば不満	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足
L	満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば不満	満足
M	どちらかといえば満足	満足	どちらかといえば満足	満足
N	満足	満足	満足	満足

第4節 まとめ

ここまで、言語の巢で働く保育者と保護者の意識を見てきた。保育者、保護者双方に共通する意識として、サーミ語、サーミ文化を学ぶことに対する高い意識と、それを子どもに伝えている言語の巢に対する高い評価とがなによりもまずあげられる。一方で、かつて絶滅の危機に瀕していたと言われるイナリ・サーミ語やスコルト・サーミ語をはじめとするマイノリティの言語を学ぶことが、マジョリティ社会での不利益をもたらすのではないかという、日本でよく見られるような考え方は、まったくといってよいほど存在しなかった。その背景には、ただ自らのアイデンティティを支えられるといった意味だけではなく、ヘルシンキの言語の巢やイナリ・サーミ語協会などでも指摘されていた、「サーミ語ができることはとくに北部では仕事につながる」という部分とも関わるのだろう。保護者は、子どもに必ずしもラップ県内に住んでいてほしいと考えているわけではない。それでも、サーミ語を覚えておけば、いざとなればラップ県内での仕事ができるかもしれないという安心感があるのではないか。

また、保育者から保護者に対しては、もっと家庭でもサーミ語を使ってほしい、あるいは園に任せきりにしないでほしいといった要望が見られた。一方で、保護者たちはすでに家庭内でも、サーミ語の使用をはじめとする多くのサーミ語、サーミ文化実践を行っていた。言語の巢に子どもが通い始めたことにより、サーミとしての誇りを覚えるようになったという保護者も多いことから、保育者が感じている以上に、保護者のなかで自分たち自身によるサーミ語、サーミ文化継承の努力は行われているといえる。

世代的にみれば、保護者の多くは「失われた世代」(Olthuis, Kivelá, and Skutnabb-Kangas 2013:30) に属している。これは、イナリ・サーミにおける 20～39 歳 (2013 年時点) を指している。学校教育でも家庭でもイナリ・サーミ語を使えず、また言語の巢へも行けなかった世代である。実際に、保護者たちのなかで、親世代からサーミ語を受け継いだといえるものは多くない。ただ、子ども世代への継承には積極的である。もちろん、言語の巢へ子どもを預けている時点でサーミ語、サーミ文化への意識は高い人々であるため、これらが「失われた世代」全体の傾向ということではできない。それでも、言語の巢の存在が、子どもたちのサーミ語、サーミ文化習得だけではなく、保護者世代の改革にもつながっているということはいえるのではないだろうか。

参考文献

Chambers, N., 2015, "Language Nests as an Emergent Global Phenomenon: Diverse Approaches

- to Program Development and Delivery”, *The International Journal of Holistic Early Learning and Development*, 1 : 25-38.
- First Peoples’ Cultural Council, 2014, *Language Nest Handbook for B.C. First Nations Communities*, (http://www.fpcc.ca/files/PDF/Language/Language_Nest/FPCC_LanguageNestHandbook_EmailVersion2.pdf)
- 松川由紀子, 1986, 「ニュージーランドのマオリと幼児教育」『日本比較教育学会紀要』12 : 67-74.
- 三井真紀, 2014, 「フィンランドの子育て支援の現状」咲間まり子編『多文化保育・教育論』みらい, 110-118.
- 宮岡伯人, 2007, 「先住民言語・多様な思考の危機」綾部恒雄監修・編『講座・世界の先住民族 10 失われる文化・失われるアイデンティティ』明石書店, 27-43.
- 水本秀明, 2004, 「フィンランド・イナリサーミによる母語存続運動」『北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要 生涯学習研究と実践』6, 105-118.
- Olthuis, M.-L., 2013, “Language Nests”, in Olthuis, M.-L., Kivelä, S. and Skutnabb-Kangas, T., *Revitalising Indigenous Language: How to Recreate a Lost Generation* (Bristol, Multilingual Matters), 129-131.
- Olthuis, M.-L., Kivelä, S. and Skutnabb-Kangas, T., 2013, *Revitalising Indigenous Language: How to Recreate a Lost Generation* (Bristol, Multilingual Matters).
- Pasanen, A., 2010, “Will language nests change the direction of language shifts? On the language nests of Inari Saamis and Karelians”, in Sulkala, H., And Mantila, H. eds., *Planning a new standard language* (Finnish Literature Society), 95-118.

(野崎 剛毅)